



Q. あなたの授業の小道具は何ですか？

高等教育研究センターでは、授業で使える小道具とその利用方法を収集しています。ぜひみなさんが使用している道具を教えてください。info@cshe.nagoya-u.ac.jp

指示棒・黒板やスクリーンの内容を説明するときに用います。最近ではレーザーポインターを使用する教員が増えていますが、指示棒の方が見やすいという学生の意見もあります。○×カード・学生に持たせて簡単な正誤問題をクイズとして導入する時に使

用します。どちらかに挙手させれば十分と考える人もいますが、その場合どちらか挙手しない学生も少なくありません。このようなカードはパーティグッズとしても市販されています。一枚10円程度です。ストップウォッチ・小テストやグループワークなど時間を決めて活動させる時に使用します。カウントダウンするタイマー機能があると便利です。評価用スタンプ・学生のレポートを返却する時に、「よくできました」や「もう少しがんばりましょう」と書かれたスタンプを押します。インクが付いた既製品は500円程度で販売されています。

ベルの法則
新任教員研修の講師をしていてよく参加者から聞かれることのひとつは、学生の私語をどのようにに減らすことができるのかという質問です。そういった時には、さまざまな先生の経験をもとに、初回の授業できちんと約束させる方法、授業中に書かせる作業などを組みこむ方法、座席指定にする方法などを紹介しています。その中で特に私がオススメしているのは、卓上ベルを授業に持っていく方法です。卓上ベルとは、お店のレジの近くに置かれていたり、学会の時間係が使用したりする、押すとチーンとなるベルのことです。

使い方は単純で、私語が気になるなど感じたら、ベルを一押しするだけです。私の経験でも紹介した教員の経験でも、「静かにしなさい」と声に出すより効果が大きいようです。また、「静かにしなさい」と言うのを繰り返すと、自分が感情的になつて授業の進行にまで影響を与えかねません。授業中の自分の心の平静を保つためにも、ベルは有効な方法と言えるでしょう。

卓上ベルに限らず、授業では身近な小道具がさまざまに使用できます。ここでは、利用の範囲が広く、また何度でも使用できる小道具をいくつか紹介したいと思います。

授業の道具というと、多くの人はプロジェクター、eラーニングのシステム、電子黒板、クリッカーなど最新のメディア機器を思い浮かべるかもしれませんが、もちろん、それらの大きな道具は、これまでできなかった学習を可能にします。しかし、身近な小さな道具でも使い方次第では、小さな力で大きく授業を改善する「てこ」になります。

身近な小道具を教室に

高等教育研究センター かわらばん



近年の大学改革では、何を学ばせるのかという視点に加えて、どのように学ばせるのかという視点が重視されるようになりました。学生の学び方の質を向上させるには、教育環境や教員についても検討する必要があります。

「教鞭をとる」という言葉が残っているように、ムチが授業の道具の定番という時代もありました。はたして現代の大学の授業を代表する道具は何でしょうか。まずは身近な小道具の使い方から、ノウハウを広く共有できればと考えています。

(中井俊樹)

フランスの大学における留学生問題

サイド・ペバンディ
(高等教育研究センター客員教授/パリ大学准教授)

大学の国際化が要請されるなか、留学生の獲得・支援が今までにも増して重要となってきています。日本以外の非英語圏の大学はどのような状況なのでしょう。今回はペバンディ客員教授に、本拠地フランスの現状をご紹介します。

フランスの大学では、1990年代末から外国人学生が急増しており(2000年17.4万人から2007年26万人)、大学生総数に占める割合は現在15%に達しています。外国人学生が多いことで、フランスの大学は世界に開かれた組織としての地位を占めてきました。彼らの受け入れは、歴史的には経済的・政治的影響力を拡大するとともに、文化・学術面での名誉を高めるという目的によるものでした。今日では、知識・能力をめぐる市場のグローバル化への対応という側面が大きくなっています。先進国の大学では、国内学生が不足している分を、外国人の学生や研究者に「門戸開放」することで補おうとする動きもみられます。

フランスでは、外国人学生の急増により、大学と社会の双方とも彼らの受け入れに関して深刻な問題に直面しています。私も参加して、2005年に1715名の外国人学生を対象に調査を実施しました。その結果、彼らの多くが重大な問題を抱えていることが判明しました。問題の範囲は広く、対人関係やことばの問題にはじまり、教育や社会の規範、教員の要求水準、講義の方法、専門的知識・方法論的知識、試験などにわたっています。社会的ギャップや精神的な孤独も、勉学の妨げになっています。出身国と受入れ国との地理的文化的な距離が大きいほど、問題は深刻になります。これらの問題を克服するために、学生は知的適応力を高めたり、大学と社会の両方に溶け込む努力をしたりすることが必要になります。自分に馴染みのない文化を理解し読み解き、さらに実践しなければなりません。ただし、それを行うためには支援が必要です。彼らの抱える問題の多くは外国人学生に固有のものであり、適切な支援を必要としています。けれども我々の調査によれば、フランスの大学による支援は未だ課題が多いと思われます。

(翻訳 夏目達也)

2009年度大学教員準備プログラム 「大学教員をめざす君へ」

高等教育研究センターでは、今年度も大学教員準備プログラムを開催いたします。授業の設計、大学教育におけるチームワーク、研究のマネジメント、大学教員のライフサイクルなどのセッションを予定しています。

ご関心のありそうな大学院生やポスドク・非常勤講師の方がお近くにいらっしゃいましたら、ぜひご案内ください。詳細は学内掲示ポスターまたはウェブサイト (<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/pff/>) をご参照ください。



日時	2009年8月6日(木)・7日(金)
場所	名古屋大学東山キャンパス全学教育棟
対象	1) 本学に在籍する博士課程学生 2) 本学に勤務する研究員または非常勤講師(教育経験3年未満)
定員	35名(参加費 無料)
申込	2009年8月3日(月)までにE-mail: info@cshe.nagoya-u.ac.jp宛てにお申し込みください。 メール本文には、氏名(ふりがな)・所属・学年/職名・授業経験の有無(年数)・連絡先をお書きください。
主催	高等教育研究センター
共催	FD・SDコンソーシアム名古屋

かわらばんへの皆さまのご意見・ご感想を裏面のEメールアドレスまでお寄せください

Higher Education Glossary

高等教育にまつわる用語集

キャリア教育 Career Education

キャリア教育は、学生に将来の生活展望を持たせたり、進路の可能性の拡大・実現に必要な基礎的知識・スキルを習得させたりするための活動です。

日本の大学、とくに私立大学の多くは、従来から学生の就職支援に熱心に取り組んできました。これらの活動が学生の就職を後押ししてきたことは間違いありません。しかし、近年は、経済状況が複雑で景気変動の周期や幅も大きいうえに、学生の多様化が進んでいることもあり、卒業間近に行う支援活動だけでは就職を促進することが難しくなっています。そのため、多くの大学では、在学の全期間、さらには卒業後の生活など長期にわたるキャリア発達の促進・支援へと活動の幅を広げています。キャリア教育は、支援活動の中で中核的な位置を占めるものです。私立大学だけでなく、国立・公立大学でも普及しているのが近年の特徴です。

キャリア教育の具体的内容としては、職業意識形成に関わる授業科目やインターンシップが中心です。授業科目として開設する場合は、各学部・学科・専攻科・別科科目（必修・選択）としても実施されていますが、多くは全学共通科目の選択としての扱いです。インターンシップも8割近くの大学が実施していますし、授業科目の中で実施する大学も全体の過半数に達しています（日本学生支援機構『大学等における学生生活支援の実態調査』（2006））。

長期の生活を展望しつつ卒業後の生活で活用できる知識・スキルを習得させようとするキャリア教育は、高等教育の本来の目的に沿うものです。そのために、ことさらに時間を設けて行わなくても、通常の教養教育や専門教育を通じて行うことが可能であり必要であるという指摘もあります。（夏目達也）

演示実験の活用とその支援——メリーランド大学の教育実践から

この春、私は米国メリーランド大学を訪問して、物理を専門としない学生を対象とした物理授業を中心に、物理教育全般を視察してきました。

なかでも印象に残ったのは、演示実験（demonstration）を効果的に用いた120名規模の物理基礎の授業でした。一般に演示実験といえば、教員が口頭説明した内容を学生の目の前で実証してみせる目的で、教卓の上で簡易な実験を行うことを指します。結果はAかBか、などと事前に予想させる場合もあります。ところがこの授業では、教員がこれから教卓の上で

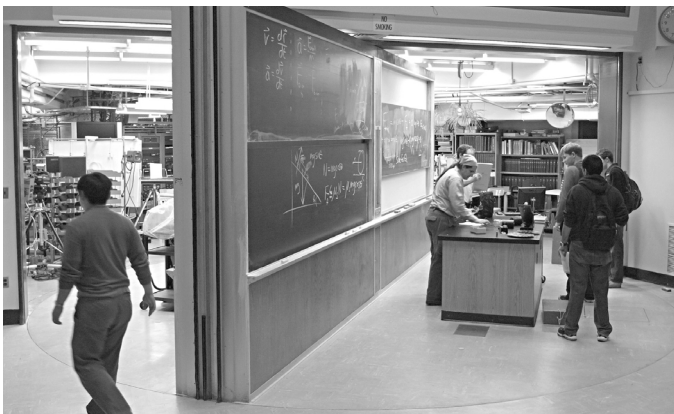
行う実験内容を説明した後、学生たちが議論を始めたのです。教員の発問に対して、学生たちは各自の日常経験や物理的洞察を基に予想を出し合い、議論を行って、結果予想を一つに絞り込んでいきます。その後、実験を行い、解説が加えられるのです。この授業では学生の物理的直観を涵養することに主眼を

おいているため、さまざまな視点から結果を予想する議論の過程を重視しています。学生たちの予想が割れて議論が白熱したものになるためには、発問内容だけでなく、実験そのものの設計が絶妙であることが必要です。

メリーランド大学には、教員が演示実験を授業に取り入れやすくする仕掛けもありました。物理授業用の演示実験用具を開発・管理している施設があり、1500を超える演示実験用具が共有されていたのです。しかも、この施設は講義室に隣接しており、写真のように、講義で用いる演示実験用具は回転式の黒板を通じてスムーズに移動させることが可能です。

日本の大学でも授業に演示実験を取り入れている教員はいますし、物理的直観を養う必要性はすでに指摘されているところです。一方で、そのような教員

の取り組みを共有したり組織的に支援したりする体制づくりは、これからの課題です。（安田淳一郎）



読んでおきたい この1冊

Great Books on University

『街場の教育論』

内田樹著 ミシマ社 2008年

本書は巷間の教育論に対するアンチテーゼである。曰く、教育論は専門的な知識がなくても誰でも気軽に参加できるが、実のところ教育とはとても複雑で慣性の強い制度である。簡単に解が見つかるはずもなく、長期にわたる忍耐強い努力が必要である。たしかに、安易な犯人捜しは現場の教員をますます疲弊させるだけであり、どんなに問題があろうとも学校や教員を総

入れ替えすることは不可能である。教員を励まして元気にさせ、意欲を高めさせることの方がはるかに現実的である。教育活動は機械のように電源を切って修理することはできないので、日常の営みの中で地道にこうした努力を行うしかない。これが本書の趣旨である。大学のF Dの本質も、悩める教員を励まし、支援することにある点で内田氏の主張と重なる。

彼の関心は若者にも向かう。昨今の自己責任や個性化志向は若者の孤独化をもたらした。むしろ今必要なのは、仲間と互助的な共同体を作り、貧しい資源を分かち合うという基本的なコミュニケーションの作法を身につけることだと言う。同感である。大学人もいたずらに横文字のスローガンを振りかざす前に、小さな共同体の中で泥臭い信頼関係を地道に築くことを若者に奨励してはどうだろうか。かつてキャンパスにこだました「連帯」という言葉は、教員世代には懐かしく、あるいは古くさく聞こえるだろうが、今どきの学生には意外に新鮮に響くかもしれない。（近田政博）

高等教育研究センタースタッフ (2009年7月現在)

センター長	木俣元一
	専門領域：西洋中世美術史
教授	夏目達也
	専門領域：高等教育学、技術・職業教育論
准教授	近田政博
	専門領域：比較高等教育学、学習支援
准教授	中井俊樹
	専門領域：大学教授法、高等教育マネジメント
助教	齋藤芳子
	専門領域：科学技術社会論

研究員	久保田祐歌
研究員	安田淳一郎
<平成21年度 海外客員>	
サイド・ベヴァンディ	(パリ第8大学)
孫 準鐘	(韓国教員大学)
<平成21年度 国内客員>	
荒井克弘	(東北大学)
小林信一	(筑波大学)
大場 淳	(広島大学)

名古屋大学高等教育研究センター

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
Tel 052-789-5696
Fax 052-789-5695

E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp
URL http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/